

**【研究ノート】資本主義経済の分析方法についての  
覚書 小幡道昭『マルクス経済学方法論批判  
変容論的アプローチ』(御茶の水書房,2012年)  
を読む 第II部「類型論批判」を中心に「典型」  
の作り方を考える**

著者	泉 正樹
雑誌名	東北学院大学経済学論集
号	182
ページ	141-160
発行年	2014-03-17
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024164/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024164/</a>

## 資本主義経済の分析方法についての覚書

小幡道昭『マルクス経済学方法論批判——変容論的アプローチ——』

（御茶の水書房，2012年）を読む<sup>†</sup>

—第Ⅱ部「類型論批判」を中心に「典型」の作り方を考える—

泉 正 樹

はじめに

「グローバリズム」の〈見方〉／〈見え方〉

著者からの〈見え方〉

先行理論からの〈見え方〉

宇野段階論に対する〈見方〉

原理論と段階論の二層化

帝国主義段階論の特質

類型論批判へ

「再純化された『純粹資本主義論』」

「傾向論」と「状態論」

いくつかの変容論

原理像の「単一性」

「分化の動力」と「内側から崩す力」

「外的諸条件相互の制約」

はじめに

〈資本主義〉という同一性を保ちつつさまざまな姿を見せる【現実】は、どのような方法に基づけばその実相を捉えることができるのだろうか。小幡道昭『マルクス経済学方法論批判——変

---

<sup>†</sup> 本ノートは、2013年3月28～30日に開催された「マルクス経済学の現代的課題研究会（SGCIME）」春季合宿研究会（於 八王子セミナーハウス）2日目午後の部「宇野方法論の批判的再検討」における、「小幡道昭『マルクス経済学方法論批判——変容論的アプローチ——』合評会」での筆者報告に基づくものである。筆者はこの報告を後に、「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter（第2期第11号－通巻第23号－，2013年9月30日発行）へワーキングペーパーとして投稿した（[http://www.unotheory.org/news\\_II\\_11](http://www.unotheory.org/news_II_11)）。本ノートは、そのワーキングペーパーに若干の加筆修正を施したものである。

容論的アプローチ——」(御茶の水書房、2012年)では、「二〇世紀末以降、資本主義は世紀の大変貌を遂げつつある」(p. i)<sup>1)</sup> という認識のもと、「マルクスの経済学」(p. iii)と、「戦後日本のマルクス経済学のなかで、特異な方法論を展開した宇野弘蔵(一八九七—一九七七)とその影響をうけた人々の議論」(p. v)に根本的な検討が加えられている。そのことを通して、著者は「変容論的アプローチ」を対置する。

本書は、第Ⅰ部「段階論批判」、第Ⅱ部「類型論批判」、第Ⅲ部「純粋資本主義批判」の三部からなる。その読み方は様々にあるであろうが、とりわけ第Ⅰ部「段階論批判」と第Ⅲ部「純粋資本主義批判」では、著者にとっての現実の〈見え方〉が率直に示されている点が印象的である。他方、第Ⅱ部「類型論批判」では著者の現実の〈見方〉、すなわち「変容論的アプローチ」が、山口重克の方法論(以下、山口方法論と記す)の検討を手がかりとして集中的に論じられている。

もちろん、現実がどのように見えるかという〈見え方〉と、現実をどのように見るかという〈見方〉とを切り離すことはできないのであり、〈見え方〉は〈見方〉に規定されるだけでなく、〈見方〉も〈見え方〉からの影響を受けるだろう。このため、本書のある部分では現実の〈見え方〉のみが論じられ、他の部分では〈見方〉のみが論じられるということはない。〈見え方〉が論じられる際には〈見方〉が、そして〈見方〉が論じられる際には〈見え方〉が裏面に貼り付いている。

こうした観点から本書を概観してみるならば、まず、20世紀末以降の資本主義の現実が、著者にはある特定の〈見え方〉をした。しかもその〈見え方〉は、先行研究が描く現実の〈見え方〉とは異なるものであったということになる。そして、著者にとっての現実の〈見え方〉が著者の〈見方〉に基づくものである以上、こうした双方の〈見え方〉の相違は、現実に対する先行研究の〈見方〉と著者の〈見方〉との相違に根ざすはずである。では、先行研究による現実の〈見え方〉とはどのような仕組みを有するのか。この問題の検討を通して、著者の〈見方〉が、先行研究による現実の〈見え方〉に対置されるのである。

その結論を一言にまとめてみるならば、〈現実とは「典型」との関係において見られなければならない〉ということであると筆者は読んだ。とはいえ、「典型」とはどのような意味で用いられているのだろうか。本ノートは、著者のいわれる「典型」の意味、そしてその作り方を学ぶという観点から本書を読んでみたいと考えるものである。それは、著者による現実の〈見え方〉を筆者なりに学ぶということにほかならない。ただ、そうした〈見方〉は一面では、著者にとっての現実の〈見え方〉に由来する部分もあろう。以下では、「典型」という概念を念頭に置きつつ、著者の〈見方〉／〈見え方〉を取り出すことに努める。

## 「グローバリズム」の〈見方〉／〈見え方〉

もとより、本書に提示・整理される著者の〈見方〉／〈見え方〉を寸分たがわず示すことはできそうにはない。筆者にとって印象的であった文言をいくつか取り上げてみるができるのみ

1) 以下、本書からの引用は頁数のみを示すこととする。

である。まずは、著者にとっての現実の〈見え方〉を可能な限り明確に切り出してみたい。

### 著者からの〈見え方〉

現実に対する著者の直接的な関心は、1990年代以降に普及した「現代用語」(35頁)、<sup>バズワード</sup>「グローバリズム (というラベルを貼られた現象群)」(35頁)をどのように捉えたらよいかという点にある。もちろん、どのような〈見え方〉を採るかによって現実の〈見え方〉はさまざまとなる。著者は、19世紀末以降の現実を前に「『マルクスの経済学』から方法論的に脱皮」(p. iii)した「マルクス経済学」、とりわけ宇野弘蔵に発する現実の〈見え方〉を足場として、たとえば次のように述べる。

結論からいえば私自身は、グローバリズムを段階としての帝国主義の延長線上に位置づけることはできない、という断絶説にたつ。むしろこの場合、今日の資本主義が本質的な変質を遂げたかどうかは、帝国主義段階に対する特定の捉え方が前提となる。(10頁)

著者による「帝国主義段階に対する特定の捉え方」に基づくならば、20世紀末以降の「グローバリズム」と呼ばれる諸現象を、帝国主義段階論の「延長線上に位置づけることはできない」のだという。著者は宇野段階論の出自を、「一九世紀末のドイツ資本主義の台頭をどのように位置づけるか、という問題意識」(208頁)に求めつつ、その「有効性」について次のような「捉え方」をする。

日本経済が低迷する八〇年代末(1980年代末——引用者)まで、宇野段階論の水脈は国家独占資本主義、福祉国家型資本主義、法人資本主義、等々、さまざまに改訂されながら、財政制度、労働慣行、企業組織、等々の非商品経済的な要因を巧みに取り込みながら、後発資本主義国が先発資本主義国を凌駕する歴史の説明原理として、リアル・タイムで有効性を発揮してきたのである。(208頁)

少なくとも1980年代末まで、宇野段階論に発する先行理論には「リアル・タイム」での「有効性」を認めることができたのだといわれる。

ところが、……一九八〇年代以降、ネオリベリズムの圧力が徐々に高まるなか、九〇年代にはいと資本主義の大地殻変動が顕在化する。この変容は、やがてグローバリズムと呼び慣わされるようになる。(208頁)

著者には「グローバリズム」と呼ばれる「大地殻変動」が見える。そこでは一体何が生じているのか。この点について、たとえば次のように述べられる。



商品経済的関係が地理的領域の面でもその内部編成の面でもともに限定される帝国主義的傾向に対して、グローバリズムの現実はいずれの面においても顕著な双対を示している。この意味で、インペリアルイズムの対概念としてグローバリズムを位置づけるという命題はひとまず定立可能なのではないかと考える。(12頁)

「資本主義の『部分性』という認識に帰着する」(11頁)とされる「帝国主義的傾向」に対して、「グローバリズムの現実」は、「顕著な双対を示」すのだという。いわば〈グローバリズム的傾向〉として、〈商品経済的関係の限定性の解除〉、あえて踏み込むならば「現下の資本主義の世界的拡張」(11頁)が想定されているように一見読める<sup>2)</sup>。後で改めて取り上げるが、「グローバリズム」のもとで「市場が覆う領域が拡大すればするほど、その限界を補完する国家、制度、イデオロギー等の役割も同時に強化される」(19頁)という著者の〈見え方〉は、同じ〈市場の拡張〉といえど、「自由主義段階」に見出された、「発生期の政治的助力をさえ必要としないで、いなむしろかかる助力を障害として排除しつつ、自力をもって『従前の経済的状態の残滓による資本主義的生産様式の不純化と混合と(を)除去』してきた」(宇野[1962] 20頁)という〈見え方〉とも異なった事柄が想定されているものと思われる。

一体、1990年代以降に生じたとされる「資本主義の大地殻変動」は、どのような意味で「帝国主義段階」と「断絶」しているのだろうか。そして、どのような意味で「自由主義段階」とも相を異にするものとされているのだろうか。

### 先行理論からの〈見え方〉

それを以下考えてみたいのだが、20世紀末以降の現実が「グローバリズム」とよばれる諸現象としての〈見え方〉ををするとしても、問題はその先にあるのだという。

さて、ここからが問題である。「グローバリズムを資本主義の長期的な発展のうちにどう位置づけるのか」という問題である。(12頁)

著者によれば、この「問題」に対して「論理的には四つの立場が考えられる」。

グローバリズムを帝国主義とは明確に異なる段階として捉えるグローバリズム＝断絶説と、グローバリズムを帝国主義の下位概念ないし一変種としかみないグローバリズム＝不在説の区別があり、これに資本主義の収斂説と多様化説の区別が交差し、論理的には

2) 本文で「あえて」と記した。著者にとって「グローバリズム」という用語が、資本主義の「『新たな台頭』であり『全世界化』ではない」(250頁)ともされるからである。20世紀末以降の「『新興経済圏の台頭』を直視すれば、資本主義内部の非市場的要因に依拠した発展が、同時に周辺部分の資本主義化を抑制してきたという帝国主義段階の一般的傾向を見直さざるをえないというのが小幡の言いたいことなのだろう」(250頁)と、その含意が解説されている。

四つの立場が考えられるわけである。(14頁)

「グローバリズム」に対する一つの〈見方〉として、「帝国主義」との関係で見る〈見方〉が挙げられている。著者が採用する「帝国主義」との「断絶」を見る〈見方〉が一方にあり、他方には「帝国主義」との連続面を見る〈見方〉があるとされ、それぞれ「グローバリズム＝断絶説」と「グローバリズム＝不在説」と区切られている。

そしてもう一つの〈見方〉として、資本主義の発展の方向性との関係において「グローバリズム」を見る〈見方〉が挙げられている。『資本論』がドイツの読者に対して示した、〈いずれイギリスのようになる〉という〈見方〉と同型の、「グローバリズム」を資本主義の(再)収斂化と見る〈見方〉が一方にあり、他方には資本主義の多様化を見るという意味において帝国主義段階論と同型の〈見方〉があるとされ、それぞれ「収斂説」と「多様化説」として区切られている。

こうした都合「四つの立場」が準備された上で、著者は、「グローバリズム＝断絶説」かつ「多様化説」の立場から次のように述べる。

現実には多様だ、といってすますのではなく、現実の多様性そのものを大きく識別整序する方法、単純化が単一化にならない理論構成が求められているわけである。グローバリズム＝不在説を切り、グローバリズム＝再収斂説を切り、右を切り左を切り、中央を突破するにはどうしたらよいのか、これが解決を求められている問題だったのである。その突破口を開くには、資本主義の原理像は一つであるという原点を問いなおしてみる必要がある。(16頁)

このように説かれる「四つの立場」のうちに、著者が推奨する立場を「○」で示して図式化してみるならば、以下になるだろう。

	グローバリズム＝(再)収斂説	グローバリズム＝多様化説
グローバリズム＝断絶説		○
グローバリズム＝不在説		

それぞれの「立場」から「グローバリズム」は特定の〈見え方〉をする。著者には、20世紀末以降の「グローバリズム」と呼ばれる諸現象が、それに先立つ「帝国主義」と「断絶」しているように見えるのであり、かつ、資本主義の発展の方向性に「新たな意味での多様化＝分極化」(13頁)を生じさせているように見える。そして、そうした「見え方」は、「資本主義の原理像は一つであるという原点を問いなおしてみる」ことを通して到達できるといわれるのである。

## 宇野段階論に対する〈見方〉

では、「資本主義の原理像は一つであるという原点」,「原理像の『単一性』」(15頁)に検討を加えるとはどういうことなのだろうか。著者は、宇野段階論の来歴、その組み立て方の分析を通してこの問題へと接近する。

### 原理論と段階論の二層化

まず、宇野段階論の大本に位置するマルクスの資本主義像を、著者は端的に次のようにまとめる。

マルクスは、『資本論』第一巻初版への「序言」で眼前のイギリスの現状は発展の遅れたドイツの将来のすがただと断じた。……『資本論』の資本主義像はここに端的に示されている。それは、いつどこで発生しようと、やがて内的な発展を通じてある窮極的なすがたに収斂してゆくというものだった。マルクスは、この発展した資本主義のうちに崩壊をもたらす階級対立の激化をみたのである。その意味でマルクスの資本主義像は、収斂説と内部崩壊論を基本としていたと解される。(109頁)

しかし、「先行して資本主義を確立したイギリスに対して、ドイツをはじめとする後発資本主義諸国(=二〇世紀末の先進資本主義諸国)が、独自の資本主義的發展の途についた一九世紀末の西ヨーロッパ」(39頁)の現実を前に、「『マルクスの経済学』から方法論的に脱皮することで」、「マルクス経済学」は誕生する。宇野はこうした「マルクス経済学」の流れのなかで、19世紀末以降に生じた現実と、それ以前の資本主義の「発展」との間に「断絶」を見出し、独自の方法論を提示した。上の引用部分に続けて著者は次のように述べる。

宇野はこの資本主義像を倒立させたことになる。労働力の全面的な商品化を基礎に、資本によって社会的再生産が編成される「純粋な資本主義」を想定すれば、それは周期的な景気循環を介してではあるが、自律的に運動し続けると主張したのである。それ故資本主義の限界も、それが純粋な資本主義に近づくからではなく、逆にそれから乖離せざるをえないところに現れるとみた。宇野は、イギリスを中心とした一九世紀の資本主義が示した、三大階級と周期的景気循環を特徴とする理論像への接近を純粋化傾向とよび、これに対して一九世紀末におけるドイツを典型とする新たな資本主義の勃興は、この傾向を逆転し純粋な資本主義から乖離せしむるものだと捉えた。(109頁)

宇野はマルクスの逆をついたのだといわれている。第二文では「純粋な資本主義」の自律性というかたちで、第三文では「資本主義の限界」が純粋像からの「乖離」によってもたらされるというかたちでマルクスの逆をつくものであったとされる。そして第四文では、20世紀末以降の現

実に、それ以前との「断絶」と「多様化」を見た著者と同じように、宇野も19世紀末以降の現実  
に、それ以前の「傾向」からの「逆転」というかたちの「断絶」と「多様化」を見たことが説か  
れていると読める。そしてそうした宇野における〈見方〉／〈見え方〉を、著者は肯定的に評価  
すると同時に再検討の対象とするのである。

資本主義の歴史的発展を説明するというマルクス経済学の課題は、原理論と段階論と  
いう理論の二層化を不可避とする。これは宇野の正着だった。しかし、その段階論の構  
成が、重商主義、自由主義、帝国主義という三段になるかどうかは別の問題である。広  
義の理論の二層目を構成する「段階論」の内容は、グローバリズムの現実<sup>3)</sup>をふまえ、  
原点に立ち戻って再検討しなくてはならない。(52頁)

第一文にいわれているのは、「資本主義は発展すれば単一の資本主義像を結ぶというマルクス  
の歴史的収斂説から脱却し、状態論<sup>4)</sup>と傾向論<sup>5)</sup>を分離することで、帝国主義段階の特殊な諸現  
象ははじめて考察可能になる」(218頁)ということであろう。その点において、宇野方法論は「正  
着だった」といわれるのである<sup>6)</sup>。しかし、「段階論」の内容、ひいては「原理論」の内容が宇野  
のようになるかどうか、「原点に立ち戻って再検討しなくてはならない」。なぜならば、19世紀末  
の資本主義における「ドイツ＝典型説と原理＝純粋資本主義説は双対をなしている」(213頁)の  
であり、もし「グローバリズムの現実」が帝国主義段階論をはみ出るものであるならば、帝国主  
義段階論と表裏一体に彫琢されてきた「原理論」にも再検討が必要になるからである、とされる  
のだろう<sup>7)</sup>。

では、「グローバリズム」はどのような意味で帝国主義段階論からはみ出ているのだろうか。

- 3) 本書第六章「純化傾向と体系的純化」には、「一方的な不純化の累積というかたちでは捉えられな  
くなったグローバリズムの現実」(183頁)という表現も見られる。
- 4) 「『資本主義の発展は益々純粋の資本主義社会に近似してくるとはいえなくなっている』という歴  
史認識を前提に、『近似してくる』という半面を延長した究極の状態を考察する議論」(218頁)→「体  
系的純化」(純粋資本主義論)
- 5) 「『近似してくる』とか『近似してくるとはいえなくなっている』とかといった、発展の方向を考  
察する議論」(218頁)→「純粋化傾向」／「不純化傾向」(純化・不純化論)
- 6) 「宇野は、資本主義の歴史的な生成・発展を扱う重商主義段階・自由主義段階に示される、『近似  
してくる』過程を『純粋化傾向』とよび、この傾向を、それが鈍化・逆転する『不純化傾向』とともに、  
段階論で説明すべき課題とした。これに対して、状態論の方は『純粋資本主義』の想定のもとに展開  
される原理論として、抽象的な完成度を高められたのである」(218頁)。
- 7) 「宇野の段階論はもともと、一九世紀末のドイツ資本主義の台頭をどのように位置づけるか、とい  
う問題意識に発する」(208頁)のであり、修正主義論争や日本資本主義論争を見つめる中で、宇野は、  
現実の説明に『資本論』を直接当てはめようとする弊を正すべく独自の方法論を開拓した。それは、  
理論の方に現実が「ますます接近するというかたち」(217頁)で「状態論と傾向論は一体」(218頁)  
であるとしたマルクスの逆をつき、帝国主義段階における「傾向」の逆転を見出すことに基づいた原  
理論の彫琢でもあった(171-5頁、212-20頁などを参照)。しかし、「グローバリズム」が帝国主義段  
階論によっては捉えきれない資本主義の「発展」を示しているとするならば、帝国主義段階論とのセッ  
トをなす「原理論」も再検討せざるを得ないことが論じられたものとして、著者の主張を読んだこと  
になる。

この点を読み解くことができれば、「原理像の『単一性』」に対する再検討を説く著者のいわんとされることも、筆者なりに整理できるように思われる。

### 帝国主義段階論的特質

本書46-52頁にかけて、著者は宇野の発展段階論が、「帝国主義段階だけではなく、資本主義の歴史的発展を捉える枠組みとして、もっと一般的なレベルで、全体の構成に不整合性を残している」(48頁)と論じる<sup>8)</sup>。その「不整合性」の内容紹介は、本ノートの本文では割愛する。ただ、著者によれば、「グローバリズム」は「宇野が原理論を基礎に構築した資本主義の歴史像の埒外に彷徨いでてしまった」(206頁)のである。そのように著者にいわしめる「グローバリズムの現実」とは、20世紀末以降の「新興経済圏の台頭」(208頁)である。

本ノートで考えてみたい問題の一つは、そのことが、どのような意味で「重商主義・自由主義・帝国主義という段階論の枠組では捉えきれない世界」(206頁)を著者の眼前に出現させているのかという点にある。著者のいわれるところを下敷きとしつつ筆者なりに再構成を試みてみたい。

さて、そうした眼で本書を読んでもと、帝国主義段階論に関して本書で繰り返し強調される「資本主義の『部分性』という認識」(11頁)が注意を惹く。自由主義段階に見出された「傾向」とは逆に、帝国主義段階においては、「資本主義の内部」(11頁)で、「国家的な政策介入や労使協調を通じた制度的調整が強化され、非市場的な要因が増大する」(11頁)だけでなく、「その外部でも資本主義の関係が抑制され、非市場的な要因が温存・強化される」(11頁)ことを通して、資本主義の新たな発展段階が画されたといわれるのである。

この二重の「部分性」こそ、自由主義段階を特徴づける純化傾向に対して、それが帝国主義段階に逆転したという認識を裏付けるものだった。(11頁)

また、「帝国主義という段階の把握は、資本主義がどこまでも同質的なすがたで自己拡張するものではないという切断面の存在を明確にするもの」(11頁)であったともいわれる。

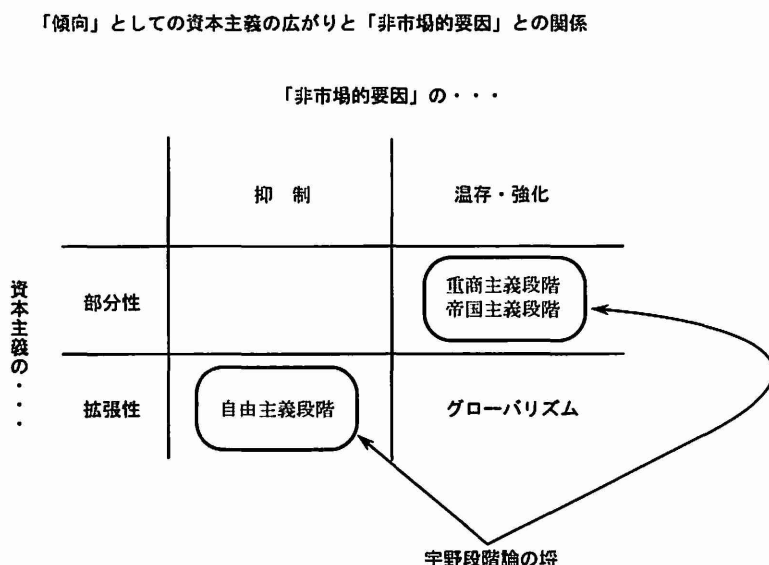
こうした叙述をそのまま裏返そうとするのは拙速ではあろう。しかし、著者において宇野の自由主義段階論は、「非市場的な要因」の抑制による資本主義の「自己拡張」という「傾向」を有するものとして捉えられていると読んでみたい。このように読んでみると、自由主義段階と帝国主義段階とを画する軸として、まず、「非市場的な要因」の〈抑制〉／〈温存・強化〉を取るこ

8) 「従来の段階論のうちには、非資本主義社会から資本主義が誕生するという《起源》の契機と、ある状態から別の状態に移行するという《発展》の契機とが絡みあっている。両者が十分に区別されぬまま、「資本主義の輸入」という観点が持ち込まれたことで、重商主義段階や帝国主義段階の規定を不完全なものにした。イギリスの資本主義化からは「輸入」の契機が払拭され「起源」だけが抽出され、ドイツの資本主義化は「輸入」による「発展」だけが抽出される。こうした問題は結局、資本主義は世界市場ただ一回、イギリスに「起源」をもつという、資本主義の《単一起源説》に帰着する。あるいは、逆に、単一起源説的な発展像が、「起源」と「発展」の区別を困難にしたというべきかもしれない」(52-3頁)。

とができるだろう。

そして帝国主義段階の特質とされる〈資本主義の部分性〉の対をなすものとして〈資本主義の拡張性〉<sup>9)</sup>でもう一本の軸を取ってみたいが、この点は、著者による「グローバリズム」の〈見方〉／〈見え方〉との関係で微妙な点を残す(本書第九章「不純化と多様化」二「資本主義の部分性」を参照されたい)。しかし、現実の歴史的発展を捕捉する枠組みを考えるという問題関心に基づいてあえてこの軸を採ってみる。

つまり、一方に「非市場的な要因」の〈抑制〉／〈温存・強化〉で軸を取り、他方に資本主義の〈部分性〉／〈拡張性〉で軸を取ってみるということになる。このように資本主義の広がり／「非市場的な要因」との関係という観点から宇野の発展段階論の組み立て方を整理しようとするならば、そのことによって捕捉される各段階と「グローバリズム」は、下図のように位置付けられることにならないだろうか。



もとより上図は補足を要する。というのも、筆者は上に掲げた各軸を、「自由主義段階」と「帝国主義段階」との対比という観点で取り上げると述べた。しかし上図には、「重商主義段階」までもが配置されている。それは、ここまでの行論を逸脱する。

そうした行論上の逸脱だけでなく、たとえば、「自由主義段階」という資本主義の「発展期に特に明らかにみられた純粹の資本主義社会への近似化の傾向」(宇野[1971] 33頁、傍点は引用者)といった文言に依拠するならば、「自由主義段階」は、発生期の「重商主義段階」と連続性を有していると読めなくもないのであり、したがって「重商主義段階」は「帝国主義段階」とではな

9) 「グローバリズムは、帝国主義を特徴づける市場の部分性に対して、文字通り双対を構成する概念だということになる。すなわち、現下の資本主義の世界的拡張の特性として……」(11頁)という記述に依拠した対の作り方である。

く、「自由主義段階」と同じグループに括るべきだといえなくもない<sup>10)</sup>。しかし、既に引用したところであるが、たとえば「発生期の政治的助力をさえ必要としないで、いなむしろかかる助力を障害として排除しつつ、自力をもって『従前の経済的状態の残滓による資本主義的生産様式の不純化と混合と（を）除去』してきた」（宇野〔1962〕20頁）」といった文言に依拠するならば、上図の配置もあり得ないものではないだろう。

また、「グローバリズム」のもとで「市場が覆う領域が拡大すればするほど、その限界を補完する国家、制度、イデオロギー等の役割も同時に強化される」（19頁）という著者の文言に依拠すれば、上図における「グローバリズム」の配置も許容範囲とは考えられないだろうか。とはいえ、グローバリズムを〈資本主義の拡張性〉として捉えることは、著者（小幡）の意図を汲み取らぬ「的を逸した読み方」（250頁）と難じられるかもしれない<sup>11)</sup>、総じて本書の縮写としては粗雑にすぎよう。上図は、著者の議論を整理するというよりも、本書の内容を筆者がこのようなかたちで〈見たい〉、つまり解釈したいという点を示していることは確かである<sup>12)</sup>。

しかし、以上を自覚しつつこのように見てみると、「宇野が原理論を基礎に構築した資本主義の歴史像の埒外に彷徨いでてしまった」と著者がいわれる意味の一面は捉えられるように思われる。なぜなら、こうした〈見方〉で見ると、確かに筆者には、「グローバリズム」が宇野段階論の「埒外」にあるという〈見え方〉をするからである。

そこで仮に上図の〈見方〉で見てみると、宇野段階論の〈埒内〉であれば、〈資本主義の部分性〉から〈資本主義の拡張性〉の方向へと「発展」の舵が切られると、それまでの〈非市場的要因の温存・強化〉は〈非市場的要因の抑制〉というかたちの「断絶」を作り出すはずである<sup>13)</sup>。しかし、「グローバリズム」と呼ばれる「現下の資本主義の世界的拡張」（11頁）は、〈非市場的要因の温存・強化〉のもとで進展しているのではないか。〈非市場的要因の温存・強化〉はそのまま維持されながらも、資本主義の広がりの中で「断絶」を生じさせているのではないか。そうであるな

10) ただし、「重商主義段階」と「自由主義段階」は「資本主義の『発生期』と『発展期』と規定されているが、『発生』と『発展』の違いは『発展』と『没落』の場合ほど鮮明にならない。『発生、発展の段階は、十七、八世紀から十九世紀中葉までのイギリスにおいて見られ、純化傾向は両段階を貫いて観察されるというのであるから、これは段階区分のメルクマールにはならない」（49頁）」という著者の指摘もある。

11) 註2の繰り返しになるが、著者にとって「グローバリズム」というラベルの意味は、資本主義の「『新たな台頭』であり『全世界化』ではない。こうした『新興経済圏の台頭』を直視すれば、資本主義内部の非市場的要因に依拠した発展が、同時に周辺部分の資本主義化を抑制してきたという帝国主義段階の一般的傾向を見直さざるをえないというのが小幡の言いたいことなのだろう」（250頁）とされている。

12) 「帝国主義段階」と「グローバリズム」との対比について、本書では、資本主義の「部分性」／「世界的拡張」が、資本主義「内部」／「外部」における「非市場的要因」の「抑制」／「温存・強化」と関連づけられている。上図の整理では「内部」／「外部」の軸が抜けており、本書の整理としては間に合っていない。この点も組み入れた作図を目指すならば、たとえば、 $x$  軸に〈部分性〉／〈全面性〉、 $y$  軸に〈抑制〉／〈温存・強化〉を取り、さらに  $z$  軸として〈内部〉／〈外部〉を取って立体的に組み立てると、より詳細な宇野段階論の〈埒〉を示すことはできるだろう。

13) 逆の言い方をすれば、〈非市場的要因の温存・強化〉から〈非市場的要因の抑制〉の方向へと舵が切られると、それまでの〈資本主義の部分性〉は〈資本主義の拡張性〉というかたちの「断絶」を作り出すはずである、ということになる。

らば、〔〈非市場的要因の抑制〉・〈資本主義の拡張性〉〕という「傾向」セットの究極「状態」をもって原理論とされてきた、これまでの「純粋資本主義論」の根本的な再検討が必要になるのではなかいか。著者の提唱される原理論の刷新の必要性は、一面ではこのように読むことができるように思われる。

## 類型論批判へ

### 「再純化された『純粋資本主義論』」

宇野方法論に対する著者の〈見方〉／〈見え方〉を、筆者は以上のように見た。では、著者はどのようなかたちで「純粋資本主義論」の再検討を考えるのだろうか。

問題は、二〇世紀末以降における資本主義の地殻変動にある。この課題を正面に見据えて、理論的考察を徹底させようとするとき、宇野が考えたような状態論と傾向論の特殊な関連にはもはや依拠するわけにはゆかない。選択肢の一つは、状態論に一元化する方向である。それは、原理論と段階論を結んでいた純化・不純化論という糸を切ることを意味する。第Ⅱ部で検討した山口重克氏の方法論がこれにあたる。(220頁)

宇野方法論に対して山口方法論は、「状態論に一元化」し、「純化・不純化論という糸を切る」行き方を示されたのだという。宇野の「純粋資本主義論」は、「宇野が『資本論』から引きずってきた純粋化傾向という発想がむしろ害をなし、『十九世紀的特殊性』の『除去』が『十分には行われていない』(山口〔二〇〇六〕一九頁)というのである」(221頁)と、山口説が紹介される。また山口方法論では、「現実の資本主義」はつねに「不純かつ多様」なものとして捉えられるのであり、それは「やがていつか純粋に向って収斂し、一様化するというようなものでもない」(山口〔2006〕100頁)(対マルクス)、さらに「現在においても純粋化の圧力は日々いたるところで作用している」(山口〔2006〕100頁)(対宇野)とされる。こうした見解を著者は、宇野の「純粋資本主義論」に残存する「十九世紀的特殊性」をさらに「除去」した、「再純化された『純粋資本主義論』」(221頁)とよぶ。

### 「傾向論」と「状態論」

このように「純化・不純化論という糸を切る」ことで「状態論に一元化」した「再純化された『純粋資本主義論』」を、著者は以下のように考える。

しかし、この純化・不純化論というのは簡単に捨てきれない性格を具えている。少なくとも一面では資本主義の歴史的変化を論じると同時に、他面では単一像を基礎づけるという、二重性を具えていることはすぐ気づくところである。宇野の場合は後者による「純粋な資本主義」の想定と、これを基準に弁別される歴史的な典型像という二段構え



の状態論に整理され、でてきた結果をみるかぎり、時間の流れのなかで生じる変化の過程は脱色されているかたちになっている。山口〔一九九二〕では、この純化・不純化の歴史過程的側面が全面的に棄却され、「現在においても純粹化の圧力は日々いたところで作用している」（山口〔二〇〇四a〕二九頁、一〇〇頁）と捉えることで単一資本主義像がさらに強調されるとともに、そこからみれば、現実の資本主義はつねに不純かつ多様なのだというかたちで、典型は類型に希釈されているように見えるのである。（129-30頁）

「でてきた結果をみるかぎり、時間の流れのなかで生じる変化の過程は脱色されているかたちになっている」が、宇野は、「状態論」と「傾向論」とを分離することで「マルクスの収斂＝近似説を超脱」（222頁）し、「純粹資本主義論」を基準として「弁別される歴史的な典型像」を取り出した。これに対して山口方法論では、「純化・不純化の歴史過程的側面が全面的に棄却され」ることで「単一資本主義像がさらに強調され」たのであり、この「再純化された『純粹資本主義論』」を基準とすることで、宇野が取り出した「歴史的な典型像」は「類型に希釈されているように見える」といわれていると読んでみる。しかしなぜ、「純化・不純化の歴史過程的側面が全面的に棄却」されると、「典型は類型に希釈」されるのか。この点を著者は、宇野に即して裏側から次のように述べているように思われる。

純粹資本主義という想定的重要性を最初に指摘した宇野の場合、この想定はただ単に静止した状態として独立に与えられたのではなく、重商主義段階から自由主義段階にかけて、国家の政策干渉や封建的な身分関係といった非商品経済的な関係の影響が後退し、小生産者の分解とともにいわゆる三大階級の形成が進み、激発恐慌を伴う周期的な景気循環を通じて、資本主義が自律的な発展を遂げるようになったという、いわゆる純粹化の傾向を基礎に提示されていた。宇野はこの傾向が、帝国主義段階に至ると逆転して、非市場的要因が果たす役割が様々な局面で増大し、この異質な諸要因との関わり方が対抗的な資本主義の典型を生みだすと捉えたわけである。（129頁）

宇野は「傾向論」と「状態論」を分離し、「傾向論」の究極を「状態論」として提示した。そしてこの「状態論」を基準とすることで、現実世界の「逆転」した「傾向」のうちに「対抗的な資本主義の典型」を見た。しかし、「再純化された『純粹資本主義論』」は、いわば「ただ単に静止した状態として独立に与えられた」ものであり、この基準によって現実を見れば、「現実の資本主義はつねに不純かつ多様」に映り、「対抗的な資本主義の典型」が析出されることにはならないということが説かれているのだろうか。「傾向論」を土台とした「状態論」に基づく「典型」まで辿り着くが、「状態論」のみでは「類型」止まりといわれていることの意味が筆者にはまだよく分からない部分もある。しかし、「典型」を提示できたという点において宇野が肯定的に評

価されているのだらうということは感知できる。

### いくつかの変容論

ならば、「典型」の提示に成功した宇野でよいのではないか。そういうことではないと著者はいわれる。

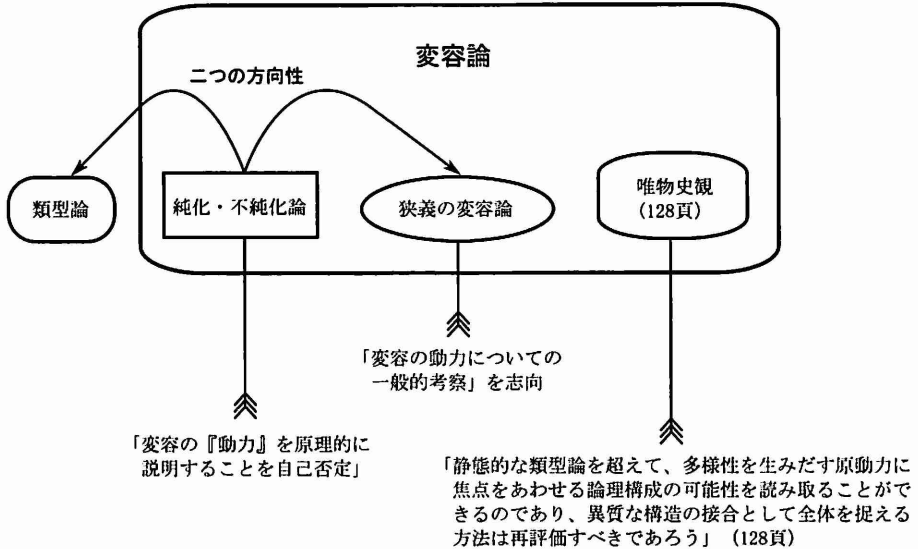
……私は広義の変容論という枠組みからみると、純化・不純化論というのはその部分集合をなすものだと考えている。そして純化・不純化論というのは、歴史的な変化の「内容」を論じていながら、結果的には変容の「動力」を原理的に説明することを自己否定する屈折した性格を有している点に問題を見出している。この点で、純化・不純化論の棄却はその蔭に隠された狭義の変容論の存在を明るみにだし、変容の理論化の回路を開く可能性がある。しかし山口氏の場合、逆の指向が全面化することになる。それは純化・不純化論の棄却とともに、それを包含する変容の動力についての一般的考察も原理論から追いだす、盪水とともに嬰兒を流すの弊無きやと評したのである。(130頁)

「純化・不純化論」は「変容の『動力』を原理的に説明することを自己否定する」という点で棄却されなければならない。しかしそのことが、「変容の動力についての一般的考察も原理論から追いだす」ことであってはならない。「純化・不純化論」を棄却することで、「狭義の変容論の存在」が探られなければならないのだという。「純化・不純化論を棄却」したという点において、山口方法論は「狭義の変容論」へと向かう途を拓けたはずだといわれるのである。「しかし山口氏の場合、逆の指向が全面化」したとされる。

要するに、資本主義の多様性を理解するという方法には、どうやら二つの方向性が伏在することになる。山口氏のいうように不変の原理像とこれに対するブラック・ボックスにいれられるさまざまな要因との合成で帰納的に多数の資本主義像を構成するのか、あるいは多様な資本主義を生成する規定的な要因を絞り、少数の、可能であれば対極的な二つの典型の必然性を演繹的に追求するのか、この分岐が存在するのである。むろん私は後者を模索せんとしているのであり、そのことはけっきょく多様性を変容という観点から捉えようとすることに帰着するわけである。(128頁)

「資本主義の多様性を理解するという方法」には、「原理論で単一の資本主義の型紙をつくり、それを現実の資本主義に当てて裁断し、切り残し部分を比較することで」(167頁)、「多数の資本主義像を構成」しようとする方向と、「可能であれば対極的な二つの典型の必然性を演繹的に追求」する方向との「二つの方向性」があり、著者は「後者を模索せんとしている」のだという。「広義の変容論」の位置にありながら、「結果的には変容の『動力』を原理的に説明することを自己

否定する」「純化・不純化論」の向かいいう方向性は、「変容論」の枠外しかないというのではない。もう一つの方向性として、「変容の動力についての一般的考察」を目指す途もあるといわれるのである。では、著者はそうした方向にどのようにして進むのだろうか。



### 原理像の「単一性」

「原理像の『単一性』」(15頁)、「資本主義像の単一性」(15頁)を根本的に検討することから始めなければならないと著者はいわれる<sup>14)</sup>。こうした観点から、本書第II部「類型論批判」第三章「原理論における外的条件の処理方法」では、山口方法論における「原理像の『単一性』」の組み立てが詳細に分析されるとともに、「狭義の変容論」へと繋がる可能性が探られる。

著者は、「この論文(山口論文——引用者)に示された方法論の最大の特徴は、原理論の内側から段階論の必要性を問いなおしてゆこうとする姿勢にある」(81頁)とする。「原理論の内側から段階論の必要性」を再検討するという点について、著者によって吟味されているところではあるが、山口論文では次のように述べられている。

純粹資本主義論は、逆説的に聞こえるかもしれないが、現実の資本主義の展開が市場経済関係の一元的な純粋化という展開の仕方を示さず、不純な、つまり市場経済的でない、いわば非市場的な諸関係との合成的・混合的な資本主義を展開しただけで終り、しかも一様な混合資本主義ではなく、時代的、地域的にそれぞれ特殊・個性的な多様な混合資本主義を展開したために、その第一次的な分析の基準として要請されたものである。したがって、純粹資本主義論には、現実には一元的な純粋化が実現できなかった市場経

14) 「単一の資本主義像を自明視するかぎり、帝国主義とは区別される固有のグローバリズム、多様化の新たな相は少なくとも理論的には捉えがたいものと化す」(15頁)。

済というシステムの限界が何らかの形で反映されているはずである。市場経済的な諸関係だけでは社会的生産を自律的に処理できないという点、つまり資本主義は現実には混合体制としてしかありえないという点が反映されているはずであると考えられる。こうして、本来的に混合的な経済システムの分析用具としての資本主義の経済理論は、第一次的用具としての純粋資本主義論だけではなく、その限界を補完するものとしての第二次的な分析用具を必要とすることになり、ここに類型論<sup>15)</sup>の理論的必然性があると考えられるのである。(山口 [2006] 36-7頁)

第一文では、現実の資本主義が、「時代的、地域的にそれぞれ特殊・個性的な多様な混合資本主義を展開したために、その第一次的な分析の基準として」、「純粋資本主義論」が「要請された」ということが説かれていると読んでみる。

第二文と第三文では、「したがって」と第一文を受けるかたちになっているが、現実の資本主義が「混合資本主義」として存在する以上、「市場経済的な諸関係だけで」「社会的生産を自律的に処理」することを論じる「純粋資本主義論」には、「市場経済というシステムの限界が何らかの形で反映されているはず」である、なぜなら、「資本主義は現実には混合体制としてしかありえない」からである、と説かれていると読んでみる。

そして第四文では、だから、現実を分析しようとするのであれば、「市場経済というシステムの限界」を反映する純粋資本主義論だけではなく、「その限界を補完するものとしての第二次的な分析用具を必要とする」のである、と説かれていると読んでみる。

このように読んでよいとするならば、では、「市場経済というシステムの限界」は、「純粋資本主義論」にどのような「形で反映されている」のだろうか。

それでは、社会的生産を市場経済的な原理だけで自立的に編成することの無理は、具体的には原理論の中にどのように反映されているのか。それは純粋資本主義をあたかも自立するかのごとくに説くために、いくつかの問題をいわばブラック・ボックスに入れている点に反映されているとみることができる。(山口 [2006] 37頁)

第一文にいわれる「無理」を、著者は、原理論研究に「決定的な変更を求めるものである」として高く評価する。

ここでは、原理論がそれ自身理論として実際には特殊な想定ないし前提のうえに展開されている点が明確にされているといってよい。社会的生産を市場経済的な原理だけで自

15) 初出の山口 [1992] (『段階論の理論的必然性——原理論におけるいくつかのブラック・ボックス——』, 山口重克編『市場システムの理論 市場と非市場』御茶の水書房, 所収) 5頁では、「類型論」ではなく、「段階論」となっている。山口において「類型論」とは、「市場経済の類型論 (市場経済の歴史的段階論と地域的諸相論の総合)」(山口 [2006] p. ii) を意味する用語である。

立的に編成することには、すでに原理的に無理があることを積極的に認めているわけである。従来の原理論では得てして、労働力の商品化という唯一の外的な条件さえ与えられれば、あとは市場経済的な原理だけで理論上は永久に繰り返すがごとく、その自立性を強調してきた傾向に照らしてみると、この主張は決定的な変更を求めるものであるといつてよいし、私もまたその意義を高く評価したい。(86頁)

しかし著者は、「純粋資本主義をあたかも自立するかのごとくに説くために、いくつかの問題をいわばブラック・ボックスに入れている点」には与しない。原理論の内部に「ブラック・ボックス」を設けて「あたかも自立するかのごとくに」純粋資本主義論が展開されてきた点に、「原理像の『単一性』」を自明視させる誘因があるといわれるのであろう。

### 「分化の動力」と「内側から崩す力」

また、著者の立論からはズレるが、上に引用した山口〔2006〕36-7頁を筆者のように読んでもよいとするならば、「第一次的用具」の次元で「純粋資本主義」が「あたかも自立するかのごとくに」説いてしまつては、「市場経済というシステムの限界」を直接的に明らかにすることができないようにも思われる。「限界を補完するものとしての第二次的な分析用具」が後に控えているのであれば、「第一次的用具」では存分に「限界」の提示に努めるという行き方もありうるからである。ただ、こうした意味での限界／補完といった切断的な考え方には両者ともに与されない。「分化・発生論的な展開」(97頁)による「信用機構を中心とした資本主義的な市場機構の形成に伴う外的条件<sup>16)</sup>の問題<sup>17)</sup>」(97頁)を例にとって、著者は次のように述べる。

こうした問題を考えるうえで重要なのは、おそらく、どこまでが商品経済の原理で説けるか、あるいはどこまでが純粋資本主義的な規定なのか、といったいわば線引きをおこなうことではないように思われる。それはいわば外界に開口している局部なのであり、こうした部分からさまざまな制度的な要因が流れ込んでくるわけであるから、そうした制度がどのような契機を固定しあるいは変更するのか、中央銀行に関していえば、たとえば発券なのか、準備率なのか、あるいは割引率なのか、など制度が作用する個別の契機を原理論の側が明らかにする必要がある。(98頁)

第二文にいわれる「局部」とは、分化・発生論を通して開封され「機構」を生じさせる「分化

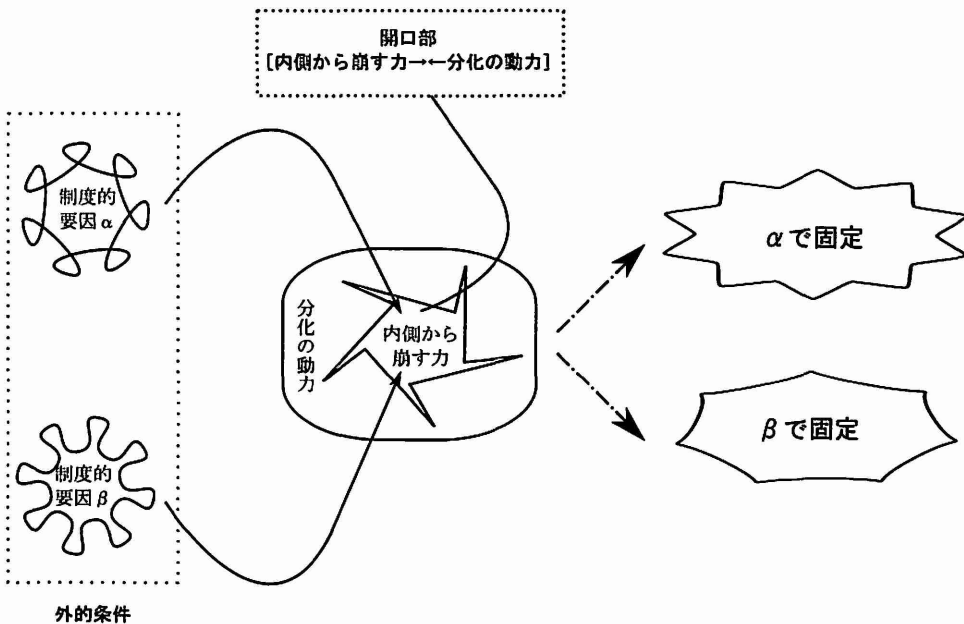
16) 「誤解を生まぬよう断っておくが、ここで外的というのは、原理論を構成する個別主体の行動原理と反応して、特定の様式に変形され内部化されるもとの条件という意味である」(89頁)。

17) 分化・発生論によって、諸機構の「分化の動力は説けるのであるが、そうした分化によって生じるであろう機構に対してはつねにそれを内側から崩す力も同時に作用することになる。こうした局部に対しては、機構を激しい変動からある程度保護した方が結果的には少なくとも有利であるという場合も多く、そうした目的を担う機構や組織が外部から導入されやすいということまでは理論的に説明がつく。中央銀行をめぐる議論などはその典型をなすといつてよい」(97頁)

の動力」と、「そうした分化によって生じるであろう機構」に作用する「内側から崩す力」とがせめぎ合う箇所を意味する。著者はこれに「開口部」という用語を充てる。著者は、こうした「開口部」から「さまざまな制度的な要因が流れ込んでくる」といわれるのである。そうであるならば、「分化の動力」によって形成される「機構」と、それを「内側から崩す力」とがぶつかる箇所を、「市場経済というシステムの限界」と捉えるかどうかは別途検討する必要があるとしても、少なくとも「第一次的用具」の次元では「開口部」の存在、穴が開いているという点が明らかになりさえすればよいのではないのか。

そうではないと著者はいわれる。「開口部」から「さまざまな制度的な要因が流れ込んでくる」としても、それは単に凹部分に凸部分が嵌って御仕舞というのではない。「分化の動力」によって生じる「機構」と「内側から崩す力」とがせめぎ合う「開口部」に嵌る「制度的な要因」が、「[内側から崩す力] → ← [分化の動力]」という「契機」を「固定しあるいは変更する」のだという。このため、まず、「分化の動力」と「内側から崩す力」とがぶつかる「個別の契機」がどの部分に生じるのか、「原理論の側から明らかにする必要がある」とされる。

そして、そうした「契機」に嵌る「制度的な要因」が、当初特定された「契機を固定しあるいは変更する」のだとすれば、少なくとも〈契機の固定〉は、嵌め込まれる「制度的な要因」によって異なった型を示すのではないか。特定された同じ「契機」に対して異なった「制度的な要因」が作用すると、作用される側の「契機」は異なったかたちで「固定」されるのではないか、といわれるのだろう。



また、ある「制度的な要因」によって〈契機の固定〉がなされていることを所与として、その箇所を別の「制度的な要因」が埋めることで、それまでの〈契機の固定〉は別のかたちでの〈契

機の固定〉へと「変更」されるのではないか。

第Ⅱ部「類型論批判」の箇所ですべて述べられているわけではないが、著者は以下のように述べる。

原理論の論理を精密化しようとするれば、逆にどこに慣行的な規制が作用し、また制度的な補強が強く求められるのか、商品経済の原理で社会的再生産を編成しようとする場合に外的条件が組み込まれる、いわば開口部の存在が理論的に推定できるわけである。そして、そこに導入される条件如何で、資本主義の外観も変化する。このようなかたちで理論を展開し現実に応用する立場、いわば弱い意味での変容論がまず考えられるのである。(17頁)

### 「外的諸条件相互の制約」

さらに著者は、特定部位における「開口部」の「固定」という局所的な視点に留まらず、さらに進んで、そうした「部分の変化が全体に及ぶ可能性」を論じる。

さらに、原理論の体系性に注目すれば、この種の外的諸条件は個々別々に分立するものではなく、それら相互の関連を解明することもある程度可能となる。金貨幣の想定と銀行間組織の様式との間には一定の関連が推定できよう。そしてその貨幣・信用制度のあり方は恐慌の激発性の説明に不可欠なものだった。このような外的諸条件を結ぶ内的関連が明確になれば、部分の変化が全体に及ぶ可能性を究明する、強い意味での変容論も考えることができる。資本主義の多様性といっても、それは不変な純粋像にさまざまな要因がバラバラに混合することで、どこまでも多様化するのではない。外的諸条件のほうも一定の構造を形成し、多様性のうちに対極的な方向性が生じる。こうして分岐の原理が明らかにできるわけである。(17-8頁)

第一文から第三文までの議論を筆者はまだ捕捉しきれていない。しかし、第四文以下では、まず、種々の「開口部」に嵌る「外的諸条件」、つまり「制度的な要因」の「内的関連」が考えられていると読める。たとえば、貨幣論の領域での「開口部」に嵌る「制度的な要因」が「金貨幣」を誘発・固定するならば、銀行間組織の箇所に存在する「開口部」に嵌る「制度的な要因」は何でもよいというのではなく、一定の制約がかかるということだろうか。たとえば[A]という型の資本主義像を可能ならしめる「制度的な要因」のセットの存在がいわれているものと思われる。そうであるとすれば、「資本主義の多様性」という問題も、「制度的な要因」の「さまざまな組合せからなる無数の類型」(126頁)によって「どこまでも多様化する」方法によってではなく、「資本主義の経済社会像を変容せしめる基本的な要因に絞って、それをもとに複数の典型を構成するかたちで多様性を理論的に捉える方法」(126頁)も考えられるのではないか。この点について、「開口部」の側から著者は次のようにもいわれる。

開口部自体は原理論の特定の領域の特定の箇所に明確に位置づけられ、外界から区別されたシステム内部で相互に関連づけられている。開口部に装着される外的諸条件は、それぞれ独立に変化しうるが、しかし、その総体はシステムの制約下であり、完全に自由に動きうるわけではない。外的諸条件はバラバラに存在するのではなく、システムの内部で相互に一定の制約を受けるのである。(238頁)

各領域の「開口部」が「システム内部で相互に関連づけられている」がゆえに、そこに嵌る「外的諸条件」も一定のセットとして存在するといわれるのだろう。こうした「開口部」間の連関による「外的諸条件相互の制約」(237頁)を、著者は「第一の籠<sup>かご</sup>」(238頁)とよぶ。

さらに著者によれば、「外的諸条件」の組合せはもう一つの「籠」によっても制約を受けるのだという。「イデオロギーの問題」(239頁)である。この点について、著者は次のように述べる。

開口部に装着される外的諸条件のセットは、原理論の内側からみれば、資本主義の内的〈状態〉という第一の籠で制約されるだけで、全体としては大きな自由度をもつようにみえるが、外部の世界からはさらに独自の一貫性を求められる。社会的慣行や制度には、それらを正当化する社会通念が必要とされる。それはだれか特定の個人ないし集団の明示的な主張ではなく、「そういわれている」というかたちの、匿名性を帯びた社会的価値観である。こうしたかたちで是認された通念をイデオロギーとよぶとすると、社会的慣行や制度はこの種のイデオロギーにくるまれている。

もちろん、同じ時代の同じ社会でも相対立するイデオロギーは併存するし、また同じ主体が状況に応じて二枚舌、三枚舌で、矛盾したイデオロギーを使い分けるのもよくみるところだ。しかし、逆にその分、イデオロギー自体は、自由や平等といった社会的価値に関して、規範として一貫性を求められる。開口部に呼び込まれる外的諸条件は、外部からみればこうしたイデオロギー的な統合の対象となる。この種のイデオロギーは、保護主義的であったり、自由主義的であったり、また社会民主主義であったり、ネオリベラリズムであったり、多様な相貌をもつが、たとえば、賃金制度に対して自由主義的なイデオロギーを主張しながら、貨幣制度に対して保護主義的なイデオロギーを主張しようとするれば、そこには社会的軋轢が生じる。外的諸条件は、イデオロギーという第二の籠によって整合性を求められるのである。(239頁)

「外的諸条件」のセットは、原理論の内外からの制約によって一定の組合せとして存在せざるをえないことが説かれているのだろう。

以上を踏まえると、「狭義の変容論」を構成する方法は、筆者には以下のようにまとめられる。

- ① まず、「分化の動力」と、それを「内側から崩す力」とがぶつかる「開口部」の存在箇

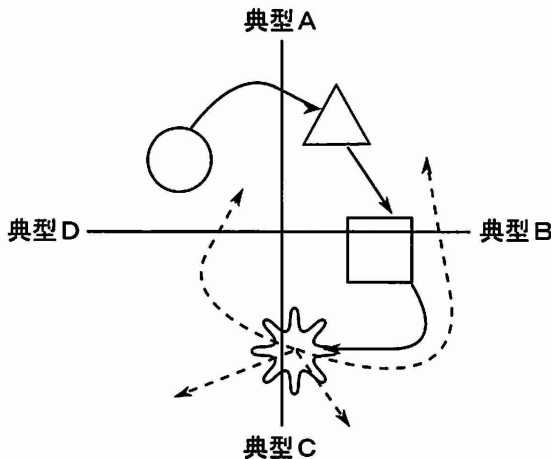


所を特定する。

- ② 次いで、「開口部」に嵌りうる「外的諸条件」の各セットを、「開口部」相互の連関を考慮しつつ作り、それら各セットを嵌めたいいくつかの型の資本主義像を提示する。
- ③ さらに、②で提示された資本主義像の諸型を、「外的諸条件」のイデオロギー的統合という観点からチェックしてさらに絞り込む。

このように①～③までの手順を経て残るいくつかの資本主義像が、「対極的」な型を示すかどうか、実際に作ってみなければ判断のつかないところではある。しかし、こうした二重のチェックをくり抜けて論理的に構成された資本主義の諸型は、様々な姿を見せる現実の資本主義に対して、「典型」的な資本主義の諸型として位置付けようように思われる。仮にそうであるとする、現実の資本主義がこうした諸「典型」からつねにズレながらも「発展」(58-9頁)するのであれば、その方向性に対する見通し・評価を、諸「典型」に基づいて行うことは一つの方法としてありうるのでないだろうか。

ひとまず現段階の筆者には、このように見える方法論が、本書に提示されているように思われるのである。



現実が、たとえば「○→△→…」というかたちで「発展」するのであれば、理論の側では、そうした現実の動きを捉えうるような「典型」を提示できなければならない、ということが論じられたものとして本書を読んだことになる。

ただ、筆者が抱くこうしたイメージでは、〈資本主義〉の枠組みがそもそも前提されており、本書に指摘されるその「起源」の問題と、そこからの「離脱」の問題は捉えきれない。その点で左図は、本書のまとめとしては限界を有する。

また左図では、「典型」がA～Dの四型となっているが、何か根拠があってそうしているのではない。「典型」像がいくつかできるのかは実際に作ってみなければ分からないだろう。

#### 〔参考文献〕

- 宇野弘蔵 [1962] 『経済学方法論』 東京大学出版会 (引用は宇野弘蔵著作集第九巻『経済学方法論』 岩波書店、1974年から行った)
- 宇野弘蔵 [1971] 『経済政策論 改訂版』 弘文堂 (引用は宇野弘蔵著作集第七巻『経済政策論』 岩波書店、1974年から行った)
- 山口重克 [2006] 『類型論の諸問題』 御茶の水書房